

上の山寺の供養写真

——花柳界鍬が崎の集合的記憶——

淵上 恭子

1 鍬が崎と上の山寺

1. 花柳界鍬が崎の繁栄史

岩手県三陸沿岸の片隅の港町—鍬が崎。潮風になぶられながら、町を横切ることおよそ15分……。鍬が崎の寛永年間から敗戦が通り過ぎてゆく。

鍬が崎はかつては三陸の海の玄関口で、大正時代に絶頂を極めた港町である。鍬が崎の上町は芸者町、下町は漁師町で、内陸からの季節労働者が流入していた時期もあった。三陸沿岸という地形から、火事（やけ）と津波（よだ）にみまわれることが多く、町は活気

があった一方で壊滅的な打撃を受けることも多々あった。だが、そのような災害の度に町の名物だった老舗が鍬が崎から突然姿を消したり、新奇な風物が突如として生まれたりして、そのつど鍬が崎は変貌を遂げていった。

この地に鉄道が開通する以前、鍬が崎の港は、大阪、讃岐、薩摩、江戸、北陸、北海道など全国各地の船が出入りする海上交通の拠点であり、各国船の風待ちの慰安港であった。明治41年（1908年）より宮古—塩釜間を結ぶ三陸定期船の発着の地となり、昭和9年（1934年）に現在の市街地の宮古に鉄道が開通す



るまでの間、鎌が崎は東日本の海上交通の中心として繁栄を誇り、当時の最先端をゆくあらゆる文明を吸収する窓口であった。そして鎌が崎は港町であるとともに、吉原と並ぶ東日本有数の花柳界でもあった。

2. 鎌が崎と花柳界

明治時代の末から大正時代中期を絶頂期として、鎌が崎は芸者が行き交い遊廓の控える港町の花柳界として華やいだ。「鎌が崎芸妓」の名は鎌が崎を訪れる商人や船乗り達の口づてに諸国に知れ渡るところとなり、鎌が崎は芸者町として有名になったが、元々鎌が崎とは江戸時代の遊廓から始まった花柳界であった。

鎌が崎の花柳界の歴史は今から約350年前まで遡り、寛永20年（1643年）の記録に鎌が崎オシャラク（遊女）の名が登場する。安政年間（1854年～1860年）の頃の鎌が崎の花柳界は、海岸部ではなく内陸部へと通じる沢沿いの現在の金勢沢一帯に形成されていて、「遊女百六十人繁昌の地」と記された。また、弘化4年（1807年）の三開伊農民一揆の時、首謀者が鎌が崎の女郎屋、庵寺に宿泊したという記録が残っている。明治以降海上交通が主流となり、鎌が崎が港町として発展し始めたのにもなって、船関係の人達を目当てに花柳界は海岸部へと移動していった。鎌が崎が港町として繁栄するにつれて遊廓も一層栄え、明治16年には鎌が崎の海岸付近が貸座敷指定区域に定められた。また、鎌が崎と諸国とを結ぶ航路の発達によって、上方や中央からも多彩な歌、踊りなどの芸が伝わってくるようになり、港からもたらされる富のうえに鎌が

崎の花街が鎌が崎文化の母体として成長していった。そして大正時代の初めには鎌が崎花柳界は全盛期を迎え、芸妓54人、娼妓54人、料亭29軒、遊廓12軒を数える程になった。鎌が崎の花街では、遊廓、芸者置屋、料亭の三者が並んで廓をつくり、これらに函番、遊芸師匠、遊女紹介所等が協同していた。栄華を極めた鎌が崎の花街であったが、昭和9年、市街地に鉄道が開通しこの地の交通手段が船から鉄道へ切り替わり始めた頃から鎌が崎の繁栄にかげりが見えはじめる。世界情勢が緊迫化し、太平洋戦争が激化するにつれて花柳界も戦時体制下へ組み込まれてゆき、芸妓達は非国民扱いされるようになる。そして終戦…。鎌が崎から花街の紅灯が消えた。

3. 鎌が崎と上の山寺

鎌が崎上の山寺…。寺へと通じる坂道の両わきには、かつて料亭だった当時の面影を今に伝える古びた木造洋風建築が点在する。坂道のふもとに元遊廓を潮風が揺るがしている。石畳の坂道を登りつつ後ろを振り返ると、かつて諸国の船が行きかた宮古湾が視界を覆ってゆく。港町だった頃の鎌が崎は、周辺の町や村とは上の山の峠を通じたのみつながっていた別世界であった。花街が華やかなりし頃、夜の闇に乗じて往来する遊客が身を隠す、不夜城鎌が崎の花街の灯が一望に見渡せた山上の峠の所に上の山寺があった。

上の山寺は5つの名前をもつ、鎌が崎の「寺」である。今から約260年前の享保4年に、浦鎌が崎念仏講中が地蔵堂を建立したのが寺の始まりであるといわれる。鎌が崎が繁栄を誇っていた当時、上の山寺は正式の寺ではな

く曹洞宗常安寺に属する小僧房で庵寺、すなわち寺のかわりに経をあげ、死者を葬る前に死者が迷わず浄土に行けるように導くための引導場であった。今はこのあたりはほとんど曹洞宗がおさえているが、曹洞宗がこの地に入り込んでくる以前には鍬が崎一帯で盛んに隠し念仏が行われていた形跡があり、この上の山寺にも念仏の人達がこもっていた。地元鍬が崎の人々は、葬儀や法要の際には大寺である常安寺へは行かずに上の山寺に集まっていた。上の山寺は鍬が崎の寺であり、鍬が崎の人々は上の山寺からあの世へと旅立って行き、鍬が崎の無縁の人々は上の山寺に留まった。

鍬が崎とあの世の境界ともいうべき上の山寺の本堂には、270枚にもおよぶ死者の写真が飾られている。最も古い写真は撮影年代が明治33年以前のもので、上の山寺に初めて供養写真が持って来られたのは大正元年であるが、その後、死者の供養のためにと上の山寺に死者の写真を奉納する者は絶えることがなかった。なぜ鍬が崎の人々が上の山寺に写真を奉納していたのであろうか。

II 上の山寺の写真

1. 鍬が崎と写真

大正時代の鍬が崎には、当時のあらゆる文明の灯が息づいていた。港の富のもたらす文明の最先端の風物が鍬が崎の人々の生活を華やいだものにし、文明の風物に彩られた人々は自らの人生の記念すべき瞬間や華やいだ時の流れを文明の風物に託して留めていた。

大正時代の三陸の別世界、鍬が崎を周囲か

ら隔てていた切り通しの断崖の、鍬が崎の境界のところには、当時の最先端の文明の館、「SANSAIKAN」という写真屋があった。鍬が崎の人々は、当時いわば非日常的な異空間であった街の境界の写真屋に出向いて行き、様々な自分の姿を写真の中に写しとった。それらの写真は「SANSAIKAN」を訪れた人々を写したのみならず、人々によって生きられた鍬が崎の街の歴史と深層をも写したものとなって、人々の集合的記憶の彼方に消え去ってゆく鍬が崎を写真の中から言葉もなく語り続けることになるのである。

2. 上の山寺の供養写真

上の山寺の270枚に及ぶ写真は、死者を悼む人々が故人を弔い、寺を訪れる人達から拝んでもらうようにと上の山寺へ納めた供養写真である。上の山寺の檀家の者でなくとも写真を奉納することができ、故人に身寄りがなく写真だけが置き去りにされることもある。そのような供養写真の中には、鍬が崎の町衆の遺影に交じって、花街が華やかなりし時の芸者のファンの納めた「鍬が崎芸妓」の艶やかな写真や、故人の写真のバックに故人が生前慣れ親しんだ当時の鍬が崎の景色と風物を取めた貴重な写真、花街鍬が崎の世相やサブカルチャーを反映した写真、戦争により異国の地で果てた鍬が崎の軍人の写真、また鍬が崎の重要な人物や出来事を今に伝える写真等の87枚の写真も含まれている。

上記の87枚の上の山寺の写真には、写真の形態や配置、奉納された年代によるいくつかのタイプが見られる。奉納した者と故人との関係、写真の形態、奉納時の状況、故人の没

年月日ないし写真の奉納年代、故人の生前の職業、故人の行年、故人の死因等は、その写真のタイプと密接な関係がある。上の山寺の87枚の写真のタイプを追ってゆき、ありし日の故人を知る今となつては数少ない人々を訪ねて聞き書きを試みたところ、写真には次のような流れがあることが明らかになった。(87枚の写真をA～Eのタイプに分類し奉納年代順に並べて整理し図表に表してみた。なお、Mは明治、Tは大正、Sは昭和を表す。)

A. 非血縁者による連記(図表A参照)

このタイプの写真は、肉親でない者が納人となつて故人の写真の下に時には数十人にもおよぶ納人達が名を連ねて上の山寺に奉納したもので、まさにここ鞆が崎の上の山寺にのみ見られる写真である。納人はすべて故人の友人、知人、同僚の芸妓、同級生、同年兵、楼主など故人と血縁関係にはない人達であり、写真に祀られている者は未婚のまま若くして亡くなった芸妓、女学生、学生、出征兵士、遭難死した漁師、および女教師といった無縁の性格を帯びた者達である。納人となっている者の大部分が、当時は学校が男女別学だったためか故人と同性・同世代の友人や仲間達である。このタイプの写真が見られたのは、大正6年から昭和15年までの25年間であり、その枚数は21枚を数えたが、奉納年代を見てみると、大正末から昭和の初め(大正13年～昭和3年頃)に頻出しており、これは鞆が崎の花街の盛衰と軌を一にしている。このタイプの写真は昭和15年を最後に途絶えてしまっている。それは鞆が崎の町にかけりが蔓延し、鞆が崎の街が終わりに近づいていた時のことで

あつた。

*Pa-2: 女教師。女子尋常小学校の裁縫の先生だった。28歳の時、盲腸の手遅れで死亡。故人の実家は料亭で、納人の中に名を連ねている故人のお姉さんは芸者となり料亭を継ぐための養女としてY家に貰われてきた人であつた。故人のお姉さんが養女に来て数年後に養父母の実子として故人が生まれた。養女である故人の姉はその後鞆が崎のナンバーワン芸者となり、血のつながりのない妹である故人を教師に育てあげた。当時の鞆が崎の花街ではこのようなことは決して珍しいことではなかつた。当時の鞆が崎の芸者は皆養女であつた。料亭を営む親は養女を芸者にして家業を継がせるが、自分の実の娘には料亭は継がせないことが多かつた。また、芸妓が養女になったきっかけには偶然的なものが多かつた。

*Pa-3: 鞆が崎町尋常小学校の女教師。スペイン風邪で死亡。大正7年、鞆が崎ではスペイン風邪が大流行し死者が多数出た時のことである。上の山寺の写真には鞆が崎の事件が現れている。

*Pa-5, Pa-8, Pa-12, Pa-13:

写真の人物は男子学生および女子学生で、鞆が崎尋常小学校の時の同級生が納めたものである。故人が没した時尋常小学校を終えていた場合は誰かが代表となつてかつての同級生の名前を連記して上の山寺に納めたこともあつた。当時を知る学校の先生によれば、ある時期生徒達の間で亡くなった友達

のために上の山寺に写真をもってゆくのが流行ったことがあったそうである。

*Pa-6: 漁船が遭難して死亡。写真に追悼文を添えて「功德者」と称する者達が納める。一見すると出征兵士の写真のように見える。

*Pa-7とPa-8:

両者はいいなづけ同士だった。各々の同級生の友人達が納めた写真が並んで掲げられている。少女(Pa-7)が死んでから一か月後に後を追うようにして少年(Pa-8)が亡くなった。

*Pa-10: 芸者。「タビ(この地方の方言でその土地のこと)」からやってきて、タビへ行った人。タビの者(よそ者)数人が奉納。

*Pa-11: 出征兵士2名の写真と一緒に納められている。2人の写真を並べて追悼文を添えて同年兵11人が納めている。

*Pa-14: このタイプの写真では唯一、故人が年輩の女性である。何かのグループのメンバーが納めたようだ。納人が世話人と称されている。

*Pa-15: 水産学校生の写真。短歌が詠まれている。当時は水産学校とは優秀な学生の行く所であった。将来を囑望された青年であった。

*Pa-18: 鞆が崎の売れっ子芸妓の写真。Pa-20と同じ年で幼なじみであった。結核で死亡。

*Pa-19: 鞆が崎の老舗I屋出身の女教師。地元では頭のいいマキであると評判の一族の出身。地元の鞆が崎尋常高等小学校の代用教員をしていた。後に尋常小学校を退職し、鞆が崎を離れて東京の

大学に入り、卒業後大阪の学校で教鞭をとっていたとき知り合った人と結婚。結婚してからは東京に住んでいた。一児を儲けて数年後、第二子を産んだ後、産後の日経ちが悪く母子共死亡した。亡くなったのは鞆が崎を離れて何年もたった後のことだったが、故人の家族の希望により分骨して故郷の鞆が崎の上の山寺で法要を行った。法要によべられたかつての教え子達に協賛してもらおうというかたちをとって、故人の家族があらかじめ用意しておいた故人の結婚時の写真を教え子達の名で上の山寺に納めた。写真には院号のついた戒名の隣に「〇〇先生」という故人の鞆が崎でのありし日の名前が記されており、写真の下に納人として鞆が崎尋常小学校卒業生の女学生達の名が連ねてあったが、故人の俗名の本名は記されていなかった。かつての教え子の女学生達の名前が学籍簿の活字で記されていた。

*Pa-20: 鞆が崎の老舗料亭T屋の芸妓。酒を飲み過ぎて体をこわして死亡。大変な美人で、美人にしかつかない戒名が付けられている。料亭T屋の五代目の女将でやはり養女だった。俗名は代々襲名された名だった。

B. 家族・親類縁者による連記(図表B参照)

このタイプの写真は故人の家族と親類縁者の連記形式のもの、あるいは妻と子など残された家族が納人となって上の山寺に納めたものである。このタイプの写真は家族の歴史、一族の歴史を物語っている。上の山寺の本堂

には、T家、H家、Y家の面々の写真群が一族ごとにまとまって掲げられている。なお、このタイプの写真の中には故人の葬式の時の写真が3枚みられ、湊が崎の貴重な民俗資料となっている。

*Pb-1： 和歌山から湊が崎にやってきたH一家の長老の写真。一族が納める。pb-13, pb-8, Pc-5 は皆Hファミリーの人達である。

*Pb-3： 故人の葬式当日の写真を家族と番頭の名前を連記して一家の名で納める。故人の葬式を出すために皆が上の山寺の坂道を登ってくるところを上の子から写した。当時の上の山寺付近の様子が写真におさめられ臨場感のある民俗誌的にも貴重な写真となっている。

*Pb-6： 故人の葬式時の写真を息子が納める。上の山寺の玄関のところで喪主が故人の写真を持って中央に立ち参列者が勢揃いしたところを写真に撮って上の山寺に納めた。上記のPb-3のH家が言うには自分達の写真を真似したとのことである。

*Pb-13： 戦死した夫の写真を妻と息子が納める。当時、息子さんはまだ2歳だった。故人は軍人で出征時の写真が納められている。その後夫人は再婚。それが当時の国策だったとのことだ。ところが再婚した夫にも昭和27年に海難事故で死なれてしまった。一度ならず二度までも夫に死なれ、三度目はあきらめたとのことだ。最初の夫である故人の写真を二度目の夫の写真(Pe-4)の写真と並べて上の山寺に掲げている。

*Pb-14： 故人の出棺時の葬列の写真を納めた。昭和23年のアイオン台風で宮古湾を隔てた湊が崎の対岸の藤原地区で死者が多数出て大惨事となったときのこと、湊が崎の浜辺にも宮古湾の潮の流れに乗って死体がたくさんあがった。当時17歳だった故人が、その様子を見に浜辺に出たところ、突然様態がおかしくなり一週間も経たずに死んでしまった。死因は今だに謎となっている。故人の母親は三陸沿岸地方の有名な巫女であった。葬式の日の出棺時、湊が崎の船付き場から宮古湾を隔てて湊が崎の向かい側にある母親の郷里の白浜の墓地に故人を埋葬するため船で向こう岸に渡ろうと、船付き場に向かって葬列が進んで行くところを写真に撮った。

C. 夫婦、親子、きょうだい等の写真を同じ額に入れて納めたもの(図表C参照)

このタイプの写真は、夫婦、親子、きょうだい、恋人(と思われる)の写真を並べて一緒に額に入れて納めたもので、二人一緒に写っている写真を納めたものもあった。写真に記載されている名字、続柄および聞き取りから夫婦、親子、きょうだいであることが確認された。夫婦のうちの後に残された者も亡くなったとき、親子、きょうだいの中で最後まで残っていた者も死に、皆亡くなってしまったあと納人が皆の写真を揃えて奉納している。死んだ後までも永遠に夫婦、親子の縁を保っておこうと考えてのことであろうか。

D. 戦死者（図表D参照）

当然のことながら物故者は全員男性で奉納された年代も終戦の年の昭和20年までである。このタイプの写真の者は皆職業軍人のようで、軍隊での階級、地位、所属を示す徽章や勲章を身につけ軍服姿で撮った写真が納められている。写真にもその大部分のものに戦死あるいは「〇〇ニテ戦死」という言葉が記されていて、故人の軍人としてのアイデンティティーが銘記されている。写真に記された戦死場所により、戦時中嶽が崎からどの戦場に軍隊が送られたか知る手がかりとなる。なお、このタイプには入れなかったが、出征時の写真が上の山寺に奉納されていたが死亡したのは終戦後内地に帰ってきてからであった、という者もあった。このタイプの戦没者の写真には納人は記されていない。

E. 漁師および海難事故死者（図表参照）

船の事故で亡くなった者には戒名に「海」という字を付けるということにより、海難事故による物故者であることが判明した。海で亡くなったことは追跡調査をしてすべて確認済みである。嶽が崎は上町が芸者町であるのに対して下町は漁師町であり、海難事故物故者の大部分が嶽が崎下町の漁民である。嶽が崎は花街であると同時に漁師町でもあることがあらためてうなずける。このタイプの写真で最初に上の山寺に納められたものは、昭和14年に同じ船で亡くなったPe-1とPe-2の写真であるが、この最初の二名のものを除く他のすべての写真が戦後になってから納められており、しかも昭和40年代以降50年代に入って

も依然として嶽が崎で船の事故が減ってはいないのが写真の奉納年代からみてとれる。このタイプの写真の物故者は全員男性であるが、物故者の年齢は40代が多く、働き盛りの漁師が海難事故で命を落としていることがうかがえる。海難事故死者の写真は、同じ船で亡くなった場合、親戚や家族でなくとも写真が並べて掲げられている。写真は普通の遺影で納人は記入されていない。

III 花柳界嶽が崎の集会的記憶

上の山寺に初めて死者の写真が奉納されたのは大正元年であった。以来、現在に至るまでの80余年間に、上の山寺に持ってこられた写真の数は約270枚に及んでいる。

死者を弔うために納められた上の山寺の供養写真には、時期により奉納される写真のタイプに流れがあり、あるタイプの写真が現れる時期と、嶽が崎を取り巻く世の中の動きには見事な連動がみられる。また、上の山寺の供養写真は、嶽が崎の町の歴史上の特筆すべき出来事を記録したものがひとつの流れなしていて、嶽が崎に生き上の山寺の写真に納まった一故人の死を通して、嶽が崎に生じた事件史をたどってゆく手だてとなる。さらに、上の山寺の供養写真は、故人の生涯を語るうえでの記念すべき出来事や、故人とその家族の生活史が背景となっているもので、嶽が崎の町の歴史と結びついた故人の生活史が写真のなかで今なお息づいている。上の山寺の供養写真には、嶽が崎の街の歴史が集約されている。

ところで、なぜ大正時代の三陸の花柳界嶽が崎に、しかも上の山寺にのみ、これだけ膨

大な数に及ぶ写真があったのだろうか。まず、なんと言っても、写真が上の山寺に納められはじめた大正時代、鎌が崎が途方もなく豊かであったということがあろう。大正時代、まだ写真が今日のように大衆化してはいず、ハイカラで非日常的でどことなく魔術的なものであった当時のこと、写真の持っていた衝撃力は今日感覚では計り知れないものがあつた。港のもたらす富を背景に、当時の鎌が崎にはありとあらゆる最先端の文明の風物が流入し、鎌が崎の人々は文明に酔いしれ、興奮気味であった。上の山寺は、そのようなあらゆる文明の風物を一身にまとった花柳界の中心街を見わたす所にたたずむ、鎌が崎界隈の周縁的な「寺」であつた。

それでは、なぜ鎌が崎の人々は上の山寺で、写真に託して死者を供養していたのであろうか。近世期以降、鎌が崎は遊里、漁師町、港町、花街の顔を併せ持ち膨張を遂げた花柳界

であつた。しかも大正期には未曾有の繁栄を誇つたところであつた。街の性格上、鎌が崎は絶えず最先端の文明や新奇なものを追い求める、流行に敏感で華やかで祝祭的、投機的なところであつた。花柳界に接して生きる鎌が崎の人々は、写真に写る機会の多かつた人達であるとも言えよう。当時は衝撃力溢れる非日常的な文明の風物であつた写真を奉納することで死者の霊を慰めようと、自宅の仏壇にではなく、鎌が崎があつた世と接する上の山寺に故人の写真を納めるといふかたちで死者の供養が行われたことに、鎌が崎という街の心性とも言うべきものが感じられる。

上の山寺は、鎌が崎の人々があつた世へと旅立って行く所であり、また死者が死後も留まり続ける無縁の者達の溜まり場でもあつた。上の山寺の写真の死者は、花柳界鎌が崎の集合的記憶を語り継いでいる。

(ふちがみ・きょうこ 本研究所研究員)

[上の山寺の供養写真 図表]

A. 非血縁者による連記

写真no.	職業	没年月日	享年	死因	納人および写真の形態
Pa-1(男)		T6.	26		友人7名(全員男性)
*Pa-2(女)	女教師	T7.5.6	28	盲腸	姉の芸妓, 姉の同僚の芸妓 故人の同僚の教師, 生徒 計23人
*Pa-3(女)	女教師	T7.	32	スベ ^レ 風邪	生徒, 同僚の教師計34人 没後約1年後に奉納
Pa-4(男)		T8.2.27	38		納人2人
Pa-5(男)	学生	T11.10.19	18		同級生(男子学生)有志 連名34人, 発起人2人
*Pa-6(男)	漁師	T13.6.	24	遭難	「功德者」(男性)26人 追悼文
*Pa-7(女)	女学生	T13.9.30	16	病死	同級生(女子のみ)46人
*Pa-8(男)	学生	T13.10.30	19	病死	同級生一同
Pa-9(女)	芸妓	T14.8.25	29	病死	同僚の女性と友人計15人

*Pa-10(女)	芸妓	T14.12.16	23	病死	同僚の女性5人, 師匠, 料亭経営者, 「死」から来て「死」へ行った人.
*Pa-11(男)	出征兵士	旧 T15.盆.16 會	- -	戦死	二人の写真を並べて飾る。同年兵11人, 追悼文.
Pa-12(女)	女学生	T15.12.13	21	病死	同級生(女子のみ)30人
Pa-13(女)	女学生	S2.旧3.3	20	病死	同級生(女子のみ)
*Pa-14(女)		S3.9.10	55		知人12人, 世話人3人他二K・K, すべて女性
*Pa-15(男)	学生	S3.	21	盲腸	水産学校の時の同級生, 教師計7人(全員男性)
Pa-16(男)	出征兵士	S9.8.15	22	戦死	同級生一同, S・T.
Pa-17(男)	漁師	S10.9.20	20	遭難	友人7人(全員男性)
*Pa-18(女)	芸妓	S15.3.20	32	結核	同僚芸妓11人, 妓楼経営者
*Pa-19(女)	女教師	S14.10.28	34	産後の日経ちが悪くて死亡	かつての教え子(女学生)達の連名形式
*Pa-20(女)	芸妓	S15.3.20	36	酒の飲み過ぎ	同僚の芸妓, 幼な友達24人(全員女性), 妓楼経営者と師匠.
Pa-21(女)		S15.6.26	41	病死	知人男女5人

B. 家族・親類縁者による連記

写真no.	没年月日	年	写真の模様	死因	納人・状況
*Pb-1(男)	T4.6.30	88		老衰	親戚が奉納。和歌山からやって来た一族。
Pb2-(女)	T8.旧12.12	35	絵の中に写真		親類一同
*Pb-3(女)	T9.12.24	70	故人の葬式の日の写真	病死	家族と番頭の名を連記して一家で奉納。故人の葬式の日皆が上の山寺の坂を登ってくるところを撮影
Pb-4(男)	T12.10.4	38			納人2人
Pb-5(男)	T13.4.26	13			家族と親戚
*Pb-6(男)	T15.10.21	59	故人の葬式の写真	病死	故人の息子が奉納。上の山寺の玄間の所で参列者が勢揃いしたところ。
Pb-7(女)	S7.4.11	26			
Pb-8(女)	S9.11.25	51			家族が納める
Pb-9(男)	T13.1.15	52			家族
Pb-10(女)	S13.旧7.16	58			家族
Pb-11(男)	S14.1.6(旧 S13.11.16)	35		船の事故	Pb-11とPb-12は家族で二人一緒に海難事故で死亡。
Pb-12(男)	S14.1.6	18			
*Pb-13(男)	S20.1.25	28	出征の時の	戦死	妻と息子が納人

*Pb-14(男)	S23. 9. 25	17	故人の葬列 出棺時の写真	怪死	両親と親戚が納める。
Pb-15(女)	S32. 9. 3	43			
Pb-16(女)	S2. 1. 18	61			
Pb-17(男)	S49. 11. 21	50			家族が納める
Pb-18(男)	—	74			家族・親戚6人で納める

C. 夫婦、親子、きょうだい等の写真を同じ額に入れて納めたもの

写真no.	没年月日	享年	関係	死因	納人・状況
Pc-1(男性) (女性)	M33. 12. 28 T4. 3. 27	69 65	夫 妻		夫と妻の写真が並べて奉納されているが納人は夫妻で異なる
Pc-2(女性) (男性) (男性)	T6. 旧6. 21 納入	31 25 26	きょうだい		故人の没年月日は記されていない 大正6年旧6月21日に奉納される
Pc-3(男性) (女性)	T12. 7. 8 T12. 9. 8	20 19			男性と女性の写真が同じ額に並べて納められている
Pc-4(女性) (女性)	T15. 3. 27 S6. 旧1. 26	19 31			納人は親戚一同と記されている 二人一緒に写った写真を納める
Pc-5(幼女) (母親)	S16. 9. 3 S17. 7. 2	2	娘 母	消化不良 急性肺炎	母親と幼い娘の写真を並べて額に入れ親戚の人達が納める
Pc-6(4人)	S8		養子4人	津波	昭和8年の津波で養子4人を一度に亡くした女性が納めた
Pc-7(女性) (女性)	S11. 2. 20 S30	33 40	姉妹		
Pc-8(父親) (幼女) (母親)			父 娘 母		戒名のみ記入。没年月日、俗名の記入なし。娘の写真を上から貼付け奉納。納人Y・N, H・N, J・N, 俗名と戒名は記入されているが納人は記入されていない
Pc-9(女性) (女性) (男性)	S19. 9. 17 S39. 11. 23 S41. 9. 6.	39 66 63	娘 母 父		

D. 戦死者

写真no.	没年月日	享年	写真に記された戦死場所・言葉
Pd-1	T3. 11. 1	33	
Pd-2	S7.	25	
Pd-3	S13. 5. 19	37	支那事変戦死
Pd-4	S14. 6. 23	23	江蘇省ニ於テ戦病死
Pd-5	S17. 8. 2	25	馬來海戦々々死者
Pd-6	S18. 5. 17	35	ビスマルク沖ニテ戦死
Pd-7	S18. 10. 26	25	祈願 鎮魂 賜勲八等 白色桐葉章
Pd-8	S19. 6. 10	30	
故陸軍整備兵長 Pd-9	S19. 9. 8	—	比島セブ飛行場ニ於テ戦死

Pd-10	S20. 1. 25	28	戦死々
Pd-11	S20. 5. 10	27	
Pd-12	S20. 5. 31	24	
故陸軍兵長 Pd-13	S20. 6. 2	—	西部ニューギニアビアク島ニ於テ昭和二十年 六月二日戦死
Pd-14	S20. 7. 1	31	戦死
Pd-15		20	
Pd-16		32	マリアナニ於テ戦死
Pd-17		—	横須賀海兵隊
Pd-18		—	故一機曹
Pd-19		—	故軍曹

E. 漁師および海難事故死者

写真no	没年月日	享年	備考
Pe-1	S14. 1. 16	35	同じ船で死亡
Pe-2	S14. 1. 16	18	
Pe-3	S20. 6. 13	50	Pb-13の納人のおじいさん
pe-4	S27. 11. 2	31	pb-13の納人の二番目の夫 pb-13と共に3枚並べて掲げる。pb-3,4, 13はH家の家族。
Pe-5	S29. 2. 27	25	
Pe-6	S31. 1. 19	28	隣に母親の写真が掲げられる
Pe-7	S41		
Pe-8	S44. 2. 3	32	
Pe-9	S45. 9. 12	42	
Pe-10	S51. 12. 2	29	
Pe-11	S52. 8. 8	46	
Pe-12	S53. 9. 3		同じ船で亡くなった者の写真を並べて掲げる
Pe-13	S53. 9. 3	37	
Pe-14	S54. 3. 14	14	溺死
Pe-15	S55. 9. 1	48	
Pe-16	S55. 10. 2	35	
Pe-17	S55. 11. 5	42	
Pe-18	S56. 3. 24	46	
Pe-19	S59. 6. 1	55	
Pe-20		40	